

東洋學報 第一〇一卷第二号 二〇一九年九月

論說

『藝文類聚』から見た初期類書の性格

付 晨 晨

はじめに

『四庫全書總目提要』卷四五類書類の序によれば、類書は経史子集にわたって書籍を網羅的に引用することを特徴とする書物である。四部分類の枠を超えた類書の歴史は曹魏初期の『皇覽』に始まる。梁の『華林遍略』（以下『遍略』・北斉の『修文殿御覽』（以下『修文殿』）がそれに続き、さらに以上の三書に基づいて編纂された唐の『藝文類聚』（以下『類聚』）や北宋の『太平御覽』などが作成された。こうした、天地万物を分類し、各類目に関連する内容を過去の諸書籍から抜き出し、これを配列する特別な編纂物である類書は、散逸した過去の書籍の断片を現代に伝えるだけでなく、編纂者の世界観をも反映していると考えられる。隋唐以前の類書を研究することは、編纂当時の人々がもっていた知識世界に対する認識を明らかにする重要な意義がある。

とはいえ、隋代以前の類書は基本的に全て散逸してしまっている。『皇覽』『通略』『修文殿』は、これらを底本に編纂された『類聚』『太平御覽』からそのおおよその姿を想像するしかない。資料の不足により初期類書の研究は多く概述に留まり、本格的な研究を行うことが困難な状況にある。こうした中、前世紀初頭に敦煌から古類書と考えられる唐写本が発見された。P二五二六と番号づけられたこの写本については、『修文殿』か『通略』か、発見以来議論が続いたが定論に至らず研究は停滞し、近年ようやく初期類書の研究史料として問題が提起された。また、前世紀中葉に、森鹿三は日本の古抄本から『修文殿』の佚文を発見した。<sup>(3)</sup>断片的であれ、信憑性のある初期類書の史料が見つかったことで、類書の発展の実態を直接検討できるようになった。それを受けて勝村哲也は、仏教類書や日本の類書を検討史料に加え、諸類書の特徴と継承関係を解明した。<sup>(4)</sup>

今世紀に入って、初期類書研究に新たな展開を示したのは劉安志である。劉は、P二五二六が『修文殿』ではなく、南朝系の類書、特に『通略』である可能性が高いことを論証した。<sup>(5)</sup>劉はこれを踏まえて中古類書の派生経路を分析し、唐玄宗期の『初學記』を境に、それ以前の類書が南朝の『通略』を重視していたのに対し、以降の類書が北朝の『修文殿』を重視するようになったこと、この変化の原因は、玄宗が唐代前期の南朝を重んじる学術的風潮（江左余風）を改め、実務を重視して北朝類書に注目するようになったことに求められると指摘した。<sup>(6)</sup>

初期類書には南朝系類書と北朝系類書があるとの氏の指摘は重要である。この指摘に従えば、従来の初期類書研究で底本の継承性が強く主張されていたのとは逆に、『通略』に代表される南朝系類書と『修文殿』に代表される北朝系類書の区別を意識しなければならない。しかし、北斉後期に編纂された『修文殿』は、『通略』を元に『十六國

春秋・六経・『拾遺録』・『魏史』などの書籍を補充して作成されたが、これは南朝系類書と北朝系類書の決定的な相違を生むものであったのだろうか。また、本論で述べる如く、劉と勝村では『修文殿』への認識がほぼ共通しているのに対して、『遍略』についての認識は異なっており、その結果として南朝系類書から北朝系類書への変化の歴史の意義の理解に齟齬が生じている。したがって『遍略』と『修文殿』の相違、また前者から後者への変化を理解するためには、まず『遍略』を理解する必要がある。

そこで、本稿では『遍略』の引用文の性格を検討する。またこの性格を解釈するにあたり、『遍略』が出る以前の『皇覽』から如何に『遍略』へと展開したか、という経緯を魏晋南北朝文化史・類書発展史の中で考える。これは、初期類書の発展史だけでなく、南朝と北朝の文化的な差異や唐代での南北朝文化の受容のあり方を理解する上でも重要な意義をもつていよう。

### 一、初期類書の性格

まず、劉説と勝村説を確認しよう。劉の『修文殿』に関する認識はほぼ勝村を踏まえているため、大きな差異は無い。問題は『遍略』についての議論である。『遍略』は現在佚文が一条しかないため、劉説と勝村説の差異は研究手段の違いによる。劉はP二五二六を『遍略』の可能性が極めて高いとして、ここから『遍略』の性格を推論した。すなわち、P二五二六の引用文は『修文殿』の佚文より長く、さらに「事」（事物にまつわる事実など）と「文」（詩文作品）を区別して引用する『修文殿』とは異なっており、一定の順序が無く、「事」と「文」が混在していると分析した。<sup>(8)</sup>

しかし、南朝には『通略』のほか、『壽光書苑』『類苑』などの類書も存在した。したがってP二五二六が南朝系類書だとしても、以上の諸書である可能性もある。この点に配慮した勝村は、『修文殿』の佚文に基づいて類書の継承関係を分析し、『通略』の性格を継承関係が最も近い『類聚』から推論し、『通略』と『修文殿』の外形的な性格を以下のようにまとめた。まず、『通略』の条文の配列は基本的に「経部書・子部書・史部書・集部書」の順で、条文は「某書云」という形式で引用され、長文の引用文が多い。次に、『修文殿』の部の配列順は基本的に『通略』を踏襲している。条文の配列は基本的に「経部書・字書・史部書・子部書・集部書」の順で、条文は「某書曰」という形式で引用され、同一書から複数条引用する際にも「某書曰」という体例を崩さず、「又曰」という形式をとることはない。また、『通略』よりも条文が短い。<sup>9)</sup>

劉説と勝村説は、内容の補充・引用文の節略の工夫・部類配列の調整については共通しているが、次の二点に大きな相違がある。まず、劉は『通略』が条文を「某文曰」と引用すると考えるのに対し、勝村は「某文云」と復元する。劉が指摘するように、一条しかない『通略』の佚文から「某文云」を普遍的な形式として復元するのは危険だろう。また、劉は『通略』の条文には決まった引用順序が無いと考えるのに対し、勝村は経子史集の順で引用されていたと見る。要するに、劉は南朝系類書から北朝系類書への変化を、北朝系類書において内容的に南北朝の書籍が統括され、引用文の順序を含めて体裁が整ったことだと考える。一方、勝村は『通略』の配列を経子史集の順である梁の書籍目録を反映したものと考え、『修文殿』は「史子」の順が入れ替わった後の目録を反映しているとした。<sup>10)</sup> 言い換えれば、『通略』から『修文殿』までの間で、「子史」から「史子」へという史部地位の変化があったこ

となる。

しかし、梁の阮孝緒「七録序」によれば、東晋の李充が西晋の荀勗『中經新簿』の甲乙丙丁四部すなわち經子史集の「子史」の順を入れ替えて「史子」として以降、官撰目録では經史子集の順が定まった。<sup>(1)</sup> 梁でも、例えば梁元帝の『金樓子』著書篇が經史子集の順で書籍を並べている。もし、勝村の推断が正しいのならば、何故『通略』は經子史集の配列法をわざわざ採用したのが問題となる。以下、勝村の論証を再検討しよう。

勝村の論証の基礎は、『通略』から『修文殿』へ、『通略』から『類聚』へ、『修文殿』から『太平御覽』へ、という重層累積的な底本の継承関係の理解にある。この点を検証すべく、勝村の議論の原点である諸類書の引用文の比較を、再度行ってみよう。

劉による『修文殿』佚文の輯校によれば、その佚文は各書に散見する。<sup>(2)</sup> しかし、森による『修文殿』佚文の再発見までは、一篇まるごとの佚文は存在しなかったため、『修文殿』の性格、特に条文配列の分析は不可能であった。そこで、『修文殿』『類聚』『太平御覽』に共通し、かつ『修文殿』の佚文をまとまった形で最も多く保存する「芸香」を取り上げて三書の間で比較し、各類書の引用文の特徴を明らかにした結果が【表一】である。近似性が認められる両『御覽』に対し、『類聚』は引用書と条文配列がやや異なっている。『修文殿』について勝村は、『太平御覽』は基本的に改変を加えずに『修文殿』を継承しているとの見解を承認しつつ、字書の引用姿勢に両者の差異を指摘した。『修文殿』が字書をあくまで經書の解釈を助けるものと意識しているのとは異なり、字書を各項の冒頭に置く『太平御覽』は、字書を經書から独立したものと意識している、と勝村は考える。仮に、『修文殿』の佚文中に

【表一】三類書による「芸香」の対比

『修文殿』巻301	『太平御覽』巻982	『類聚』巻81
1 大戴禮夏小正	3 大戴禮夏小正	
2 禮記月令	4 禮記月令	1 禮記月令
3 說文	1 說文	
4 雜字解詁	2 雜字解釋詁	
5 魏略	6 魏略	
6 博物志		
7 承集禮圖	5 禮圖	
8 洛陽宮殿簿	7 洛陽宮殿簿	3 洛陽宮殿簿
9 晉宮閣名	8 晉宮閣名	4 晉室閣名
10 廣志	9 廣志	
11 吳氏本草	10 吳氏本草	
12 曹植芸香賦		
13 傅玄芸香賦序	11 傅玄芸香賦序	7 晉傅玄賦序
14 成公綏芸香賦	12 成公綏芸香賦	6 晉成公綏芸香賦
15 傅咸芸香賦	13 傅咸芸香賦序	5 【賦】 晉傅咸芸香賦
		2 倉頡解詁

紙幅の都合により史料本文の引用は割愛する。表中の数字は、各類書中での引用順を表す。各類書の底本は以下の通り。『修文殿』は註(3)森論文②による。『太平御覽』（中華書局、1960年）。『類聚』（上海古籍出版社、1965年）。以下底本が上記のものである限り、再度注記しない。

字書を一番上に据えるものがあつたとしても、それは引用すべき経部書が無いために、見かけ上、字書が最初に配列されたかのような体裁になっているに過ぎない、と勝村は想定する<sup>(13)</sup>。『修文殿』のほかの佚篇でも確かにそのようなになっている。しかし、勝村は類書で字書が冒頭に位置するようになるのは『類聚』からだと考えるが、P二五二六には字書が冒頭にある。南朝系類書は既に字書を冒頭に引用していたのだろう。『類聚』が多数の項目で字書を冒頭に置くのは、その底本である『遍略』の影響であると考えられる。

しかし、勝村の指摘を根拠に『修文殿』の条文配列が「経(字)史子集」だと考えると、表中の『修文殿』の6『博物志』と7『承集禮圖』は、それぞれ子部書と経部書であるため、上記の基準とは合致しない。『修文殿』を全面的に継承する『太平御覽』が『博物志』を収録しないのは、森・勝村ともに『太平御覽』の脱

漏だと考えた。しかし、編纂に当たり脱漏はよくあることだが、この脱漏には別の事情があると思われる。『修文殿』の引用文は「博物志曰南陽梁正伯夷芸臺承集禮圖曰蒿也葉似取蒿香美可食」となっており、『博物志』の内容は解説できない。このため、『太平御覽』は『博物志』を削除し、『承集禮圖』を『禮圖』と改め、経書の配列位置に繰り上げたと推測できる。こうして『太平御覽』の「字（1—2）経（3—5）史（6—8）子（9—10）集（11—13）」という秩序ある配列が形成されたのである。

しかし、『修文殿』を『太平御覽』に移植する際、何故わざわざ『博物志』と『承集禮圖』にだけ手を加えたのだろうか。『新修政和證類本草』卷六芘胡の注に「陶隱居云今出近道、狀如前胡而強。博物志云、芸蒿葉似邪蒿、春秋有白蕝、音弱、長四五寸、香美可食、長安及河内竝有之。」とあり、『修文殿』の「博物志曰南陽梁正伯夷芸臺承集禮圖曰蒿也葉似取蒿香美可食」と類似した部分がある（傍線は筆者）。これより、『禮圖』の内容は『博物志』内部の引用部分である可能性が考えられる。つまり、『修文殿』はただ『博物志』のみを引用したのである。これで経部書たる『禮圖』が、『修文殿』の子部書の配列位置に出現した問題が解決したことになる。

また、表中の『修文殿』の6「博物志」と子部書たる10・11との間に出現した『洛陽宮殿簿』『晉宮閣名』は、『隋書』経籍志（以下『隋志』）の基準によれば、両書とも地理に関する書籍として史部に帰される。しかし、梁元帝の『金樓子』著書篇では『荊南志』『江州記』などの地理書と思われる書籍が丙部（子部）にあるように、地理書籍は梁末に至るまで、史か子か、その帰属がまだ定まっていなかった。<sup>14</sup> そのため、ここでは仮に両書が未だ子部に留まっている地理書と見ることで、『修文殿』の經史子集の序列が成立していたと考えておきたい。

以上では、『類聚』の引書種類が少ないため、その引用順序を検討できなかった。しかし、後掲の【表二】のように、両『御覽』で子部にある『廣志』が『類聚』では字書に似た扱いを受けて先頭に配列され、事項の解説を行っている点に注意したい。これも、両『御覽』とは異なる特徴であることを、ここでひとまず指摘しておく。

以上、勝村の『修文殿』に関する見解を基本的に承認した上で細かい修正を試みた。改めて強調したいのは、南朝系類書は既に字書を冒頭に置いていたこと、『修文殿』は佚文から確認できる限りでは地理書を子部書と見なしていることの二点である。一方、勝村の『遍略』に関する見解は佚文の比較によるものでなく、『遍略』を『類聚』の底本と考え、『類聚』の全体的な特徴から導いたものである。次節では、『類聚』を検討対象に、『遍略』の引用文の配列順序を明らかにしたい。

## 二、『類聚』から見た『遍略』の条文配列

以下では、『類聚』の引用文の配列を分析することで、『遍略』の引用文の配列を再検討する。

### (一) 先行研究の検討

類書の引用文の序列の分析は難しい。これは勝村が指摘するように、引用文には複数の底本から直接抄出した内容が含まれるだけでなく、編纂時に新たに加えられたものや、後世に挿入されたものを含む可能性を考慮しなければならぬからである。<sup>15)</sup> 汪紹楹の『類聚』校序が明らかにしたように、『類聚』には『初學記』を利用した増補が含



まれ、『類聚』巻八七―八九等の数巻は『類聚』のほかの引用例とは異なり、かなりの程度の改変が加えられている。本稿で使用する汪の点校本の底本は、現存最古の版本である。『類聚』は抄本の時代に作成された。抄本の時代から刻本の時代までの長い期間で、同一書籍中の内容が増減したことに注意しなければならない。しかし、以上の問題は、『類聚』全体に見られるわけではないので、条文の配列を全体的に把握する上では、多少の誤差があっても大きな問題にはならないだろう。以下では、こうした問題に留意した上で、『類聚』の条文配列の全体的な特徴を把握する。

まず、勝村の考証を簡潔に確認する。<sup>16)</sup>『類聚』が序文で強調する如く、『文章流別』『文選』が専ら文を収録し、『皇覽』『遍略』はただ事を収録したのに対して、『類聚』は両者を統合した。勝村は、『類聚』の撰者は書物を『遍略』や『修文殿』など前代の類書から転録し、詩文を相当量加えたと考えている。「事」の部分では、各類目で「事」を引用するにあたって前代類書から相当量の内容を採録し、次に、各巻の総量を勘案して、別の類書から採録したり新たに追加したり、あるまとまり（群）をもって採録したという。いま、勝村の作成した表2（巻五〇刺史篇）と表3（巻九五鼠篇）を文面で表現すると、次のようになる（「一」「」は勝村の言う「群」を示す）。

（一）表2【漢書・司馬彪續漢書・東觀漢記・謝承後漢書・華陽國志・三輔決錄・魏志・晉陽秋】・【魏志・魏略・王隱晉書・曹嘉之晉紀】

魏晋代に関する史書が二度現れたことから、【一】で示した『漢書』から『晉陽秋』までが一群、それ以降の【二】のまとまりがまた別の一群で、『魏志』が重複しているのは二つの群が異なる底本を使用しているためである、と勝

『藝文類聚』から見た初期類書の性格 付晨晨

七七

村は考える。

(2) 表3【爾雅・方言・説文・易・毛詩・詩義疏・左傳・晏子春秋・尹文子・莊子・賈誼書・列子・淮南子萬畢術・史記・「東方朔神異記・京房易飛候」・漢書・廣志・竇氏家傳・魏略・魏志・博物志・列異傳・晉陽秋・「抱朴子內篇」・晉太康地記・梁州記・劉欣期交州記・秦州記・異苑・幽明錄・述異記・「地鏡圖・風角要占・雜五行書」】

(2) は全体的に「字經子史」の順で配列されているため、勝村は主な底本を『遍略』と見る。ただし、「」でまとめた東方朔『神異記』等・『抱朴子』等・『地鏡圖』等の配列を乱している箇所は、『類聚』撰者の追加挿入部分と勝村は考える。

一方、『類聚』に詳細な校正・訓読・分析を加え、索引を作成した大東文化大学東洋研究所『芸文類聚』研究班は、『類聚』の基本的な条文配列を「字經史子集」と考えており、ある書籍に続けて四部分類の異なる関連書籍が挿入されているために無秩序な配置が見えろとし、なかんずく、部類ABCの配列でABCBCのような場合は、後半のBCは後人による挿入と考える。<sup>(17)</sup> この基準で考えろと(2)は以下のようになる(括弧は筆者)。

(2) (爾雅・方言・説文) + (易・毛詩・詩義疏・左傳) + (晏子春秋・尹文子・莊子・賈誼書・列子・淮南子萬畢術) + (史記・東方朔神異記・京房易飛候) + (漢書・廣志・竇氏家傳・魏略・魏志・博物志・列異傳・晉陽秋・抱朴子內篇) + (晉太康地記・梁州記・劉欣期交州記・秦州記・異苑・幽明錄・述異記・地鏡圖・風角要占・雜五行書)

「字書 + A + C + BC + BC + BC」という研究班説の通りとなるが、問題となるのは、以下で述べるように、『類聚』の多くの篇目は経の次に子を引用していることである。研究班説と勝村説の違いは、『類聚』が前代類書をそのまま「群」として引用したか否か、『類聚』の条文配列は「史子」か「子史」か、この二点にある。

このように、『類聚』から『通略』の条文配列を復元できるか否か以前に、『類聚』の条文配列に異説が存在している。以下では、両者の議論を念頭に『類聚』の条文配列を分析する。

## (二) 異例からみた『類聚』の条文配列

『類聚』は引用文を基本的に「事」と「文」に分類している。もし、「事」中の引用文が四部分類で配列されるとすれば、集部が必ず「事」内の最後に引用されることになる。『類聚』の「事」に集部書として最も多く引用されているのは『楚辭』である。ところが実際には、『類聚』に引用された『楚辭』の一〇一例のうち(『楚詞』と『離騷』も『楚辭』に含める。「又曰」で始まる収録文は計算に含めない)、「事」の最後に配列されているのはわずかに一例であり、大部分は「事」の中間部分に引用されている。以上を踏まえると、底本が重層しているという勝村説や、後の挿入による誤差とする研究班説には疑問が残る。

それだけではない。『類聚』にはまた、「事」の部分に明らかな集部書を引用している例が存在する。『王渾集』(巻四元正)・『何禎集』(巻六閏)・『束皙集』(巻九冰、巻四八給事中)・『諸葛亮集』(巻二智、巻九四牛)・『馮敬通集』(巻三五姪)・『傅咸集』(巻四七特進)・『華嶠集』(巻四八散騎常侍)・『裴頴集』(巻五二赦宥)・『漢武帝集』(巻五六詩)・『庾

【表二】三類書による「瑠璃」の対比

『修文殿』	『太平御覽』卷808	『類聚』卷84
	1 孝經授神契	
1 廣雅	2 廣雅	1 廣雅
2 韻集	3 韻集	2 韻集
(前引省略)*	4 漢書地理志	5 漢書
3 續漢書	5 續漢書	
	6 漢武故事	
4 魏略	7 魏略	6 魏略
5 後魏書	8 魏書	
	9 吳曆	7 吳歷
	10 晉書	
	11 洞冥記	
	12 拾遺記	
	13 世説	10 世説
		11 (世説) 又曰
		12 (世説) 又曰
6 廣志	14 廣志	3 廣志
(前引省略)	15 南州異物志	9 南州異物志
7 十洲記	16 十洲記	4 十洲記
8 杜篤論都賦	17 杜篤論都賦	
9 諸葛恢集	18 諸葛恢集	8 諸葛恢集
10 傅咸汚卮賦	19 傅咸汚卮賦	
11 左思吳都賦	20 左思吳都賦	
12 虞闡揚都賦		
13 孫公達琵琶賦	21 孫公達琵琶賦	
		13 【賦】 晉潘尼瑠璃椀賦

\* 森論文②の見解に従い、『修文殿』の引用文が省略されている場合があるのは、底本となった抄本がそれ以前の項目で同内容の書籍を既に引用し、それ以降では引用自体を省略していたためと考える。

翼集』(卷七四樽蒲)・『諸葛恢集』(卷八四瑠璃)等がそれである。そのうち、『束皙集』(卷九冰)・『庾翼集』のみが「事」の末尾に引用されている。この原因を探る上で『類聚』の重要な底本とされる『通略』が散逸してしまったのは残念だが、幸いにも『類聚』の底本の一とされる『修文殿』瑠璃の条が今も残されている。以下では『修文殿』『類聚』『太平御覽』の瑠璃の条を比較してみよう。

【表二】から、両『御覽』は引用文の内容と順序とが一致する部分が極めて多いことが見て取れる。しかし、『類聚』はこれらと異なる

る。まず『廣志』の位置については前述の如く、『廣志』は字書的な扱われ方をしている。次に、『類聚』の4『十洲記』から12『世説』までは、明らかに四部分類順にはなっておらず、むしろ時系列順に配列されているといえる。前漢・東方朔(『十洲記』)↓後漢・班固(『漢書』)↓曹魏・魚豢(『魏略』)↓西晋・胡冲(『吳歷』)↓東晋・諸葛恢(『諸葛恢集』)↓?(『南州異物志』)↓劉宋・劉義慶(『世説』)、という具合である。『南州異物志』がもし呉・万震撰の同名の書籍だとすると、これは三国時代の書籍である。これが東晋『諸葛恢集』の後に配列されているのは、何らかの錯誤があったのかもしれない。

類書の引用文の配列が四部分類だという説は、初期類書研究の通説となっている。ただし、劉葉秋が概説の中で『類聚』は引用文を全て時代順で配列していると早く指摘しているが、殆ど顧慮されていない<sup>19</sup>。この可能性を考慮しつつ、再び『類聚』の引用文の配列順序を見てみよう。『類聚』には全七三二項目があるが、『隋志』の分類に従って各書籍を経史子集の性格に分類すると、完全に「経子史」の順で引用文が配列されているのはわずかに六一項目で、完全に「経史子」の順で引用文が配列されているのもたった一九例である。大半の条文はこれらの純粋な配列方法には帰属し得ないのである。一見して四部分類で配列されているかのような大量の条文も、内部の引用文を細かく区分してみると、子部書に紛れた史部書、史部書に紛れた子部書が存在している。すなわち、研究班説のABCBCの状況である。以下、その例をいくつか見てみよう(傍線は子部書、波線は集部書を表す)。

(3) 尙書禹貢・春秋元命苞・孫卿子・列女傳・謝承後漢書・吳志・吳錄(卷八江水)

(3) は「字」経子史」の典型例である。

『藝文類聚』から見た初期類書の性格 付晨晨

(4) 爾雅・說文・毛詩・戰國策・論衡(卷九五兕)

(5) 曹瞞傳・魏略・晉中興書・郭子・語林・世說(卷七〇胡牀)

以上は「字経」史子」の典型例である。しかし、『類聚』の引用文の配列の多くは次のようなものである。

(6) 周官・禮記・左傳・論語・逸禮・晏子・呂氏春秋傳・王孫子新書・史記・漢書・說苑・漢武帝故事・東觀漢記・謝承後漢書・汝南先賢傳・魏略・魏志・吳志(卷二四諫)

(7) 毛詩・左傳・晏子春秋・孔叢子・漢書・續漢書・魏略・蜀志・吳志・江表傳・典略・諸葛恪別傳・王隱晉書・晉中興書・文士傳・顧愷之家傳・語林・世說・沈約宋書(卷二五嘲戲)

以上の各例は「子史」或いは「史子」と純粹に區別することはできない。ところが時代順に配列されたことが明瞭な史書に着目すると、各子部書は隣接する史部書に近い時代に成立した書籍であることがわかる。従って、以上の各例はおおよそ時代順に配列されたものだと見える。こうした視点から再び文集が挿入されている例を見てみると、そうした文集は編集時のミスによるのではなく、基本的には時代順に配列されたものであることがわかる。先に検討した『諸葛恢集』以外にも、次の三例が存在する。

(8) 尚書・列子・孔叢子・東觀漢記・漢書・漢雜事・典略・魏略・王渾集・晉咸康起居注・世說・鄧德明南康記・裴玄新語(卷四元正)

(9) 左傳・毛詩序・山海經・文字・漢書・馮敬通集・典論・魏志・王隱晉書・郭子・妬記・異苑・俗說(卷三五妬)

(10) 漢雜事・百官表注・傳ト咸集・齊職儀・沈約宋書(卷四七特進)

ただし、強調したいのは、全ての引用文が時代順に配列されているわけではないことである。まず、字書は先に配置される。次に、明らかに六朝期成書の(2)『詩義疏』が『毛詩』と『左傳』の間に配列されている如く、経部書もほかの部分と区別され、一つのまとまりとして字書の次に配置される。つまり、「字・経+経以外の書(時代順)」のようになる。時代順とは、史書の成書年代ではなく、書籍が対象とする王朝に従った配列であり、同一王朝を対象とする書籍は成書順に並べられているようである。子書も実際の成書年代ではなく、作者とされる人物の時代に帰属している。

こうした視点から(2)から(10)の例を再び見てみると、ほぼ全て時代順で配列されていると考えられる。『類聚』が主に経子史集の順で配列されているように見えてしまうのは、引用された子書の大部分は先秦諸子の書であり、時代順ならば前方に配列されがちだからである。まとめれば、『類聚』の「事」の引用文の順序は一般に考えられている四部分類に沿ったものではなく、また、劉葉秋が指摘するように全て時代順になっているわけでもなく、「字・経+経以外の書(時代順)」という、字書・経部書をはじめに置き、それ以下は王朝ごとの時代順で経部以外の書籍を配列するものだったのである。しかし、『類聚』の全ての篇目が整然と時代順で配列されているわけではない。中には複雑で配列基準の判断が難しいものも決して少なくはなく、後人の改竄によるものかもしれないが、断定はできない。そもそも、『類聚』の基本配列は『類聚』編纂時のものであるのか、底本(『遍略』)のものであるのか。以下ではこの問題を検討する。

## (三) 『通略』の条文配列

『類聚』の主な底本は『通略』である。これは、その序が先行する類書として特に『通略』を挙げていること、本文では梁の避諱が残っていること、梁代に佚して『類聚』編纂時には存在しなかった書籍が引用されていることなどから、『通略』を引き継いだとしか考えられないためである。しかし、『類聚』は『通略』の条文配列の順序まで継承したのだろうか。まず指摘できるのは、字書を冒頭に置く『類聚』の特徴が南朝系類書に由来することである。さらに、『類聚』がその序で明示した「其れ事の文に出づる者有れば、便ち之を破りて事と爲さず、故に事は其の前に居り、文は後に列す<sup>(20)</sup>」という原則は、『類聚』が『通略』の条文配列を継承したと言いつる決め手となる。『類聚』には「事」と「文」の二大区分があり、「事」に分類され得る記述の出典が「文」に区分され得る文章に含まれている場合、その記述の部分だけをその文章から切り取って「事」に所属させるようなことはせず、文章ごと「文」に分類するという。南北朝類書が詩文を収録していたことはP二五二六から明らかである。ただし、『類聚』序によれば、『通略』はただ「事」のみを集めたという。つまり、『類聚』から見た『通略』は、詩文も「事」として記載していたと言える。すると、『類聚』がこれらの類書を底本とした場合、必ず底本中の「文」に分類すべき文章を、改めて「文」に帰属させる作業が必要になるだろう。

右の作業は次の事例から想定される。【表一】から分かるように、『修文殿』は經史子集の分類で書籍を引用し、『類聚』には『修文殿』と同じ引用書が見える。前述の如く、『類聚』は詩文を「文」で引用するのを原則とし、実



際に【表一】で『修文殿』と共通している詩文も「文」で引用している。これは、『類聚』が詩文を経史子集の枠組みから抜き出し、改めて「文」に所属させたことを物語っている。ただし、この原則が破られているかに見える事例もある。すなわち前節で指摘した、「事」に残された若干の文集の引用である。これは如何に理解すべきか。一つの解釈は、「事」中の文集の引用は上秦文などの行政関連の文章が殆どであり、「文」に分類されている如き詩文でないから、「文」ではなく「事」と認識された、というものである。しかし、【表二】に見える『諸葛恢集』は、『類聚』瑠璃篇では「事」で引かれていながら、同書卷七三盤篇では「文」で「梁諸葛恢表」とも引用されており、内容から見て瑠璃篇の『諸葛恢集』は盤篇「諸葛恢表」を節略したものである。<sup>(23)</sup>注目すべきは、『隋志』によれば『諸葛恢集』は唐初には散佚しており、『類聚』編纂時には直接参照し得なかつたであろう書籍だということである。<sup>(24)</sup>底本から転引された可能性の極めて高い以上の二条は、『類聚』の原則から、盤篇のようにどちらも「文」に置くべきであり、盤篇はこの原則を守っている。しかし、瑠璃篇がこの原則を破って『諸葛恢集』を「事」に引用しているのは、底本にあったものを動かさず、そのまま残したからであろう。【表二】によれば、『諸葛恢集』は両『御覽』では集部に帰属しており、『類聚』の配列とは異なる。従って、『類聚』の底本は『修文殿』ではなく『遍略』と考えるのが自然である。<sup>(25)</sup>

加えて、例(9)で「事」に分類されている『馮敬通集』は、後漢の馮衍の文集で、敬通は彼の字である。彼の作品で『類聚』の「文」に見えるものは、「後漢馮衍頭志賦」(卷二六言志)・「後漢馮衍杖銘」(卷六九杖)などのように、直接に名を示している。<sup>(26)</sup>例(9)で『馮敬通集』と彼の字が使われているのは、底本の『遍略』が梁武帝の諱

を避けたものをそのまま継承・移録したためだろう。このように『類聚』の「事」に見える文集は、底本のものを残している可能性が高い。さらに、以上で見た諸文集をもつ篇では、引用文はほぼ時代順で配列されている。ここから、底本である『通略』が引用文を時代順で配列していた可能性が高いことが想定できるのである。

では、『通略』がこの順序を採用したことには如何なる意味があるのだろうか。次章で検討しよう。

### 三、初期類書と漢唐間注釈史

#### (一) 『通略』条文配列の性格

前章の検討から、『通略』の書籍引用法は「字・経＋経部以外の書（時代順）」だということが明らかになった。そうであるとするならば、こうした構造が示す意義を改めて考えなければならぬ。

そこで、再びP二五二六に注目してみよう。P二五二六は「字・経＋その他（序列基準なし）」の順と考えられる。つまり、『通略』とP二五二六との区別は、経部書以外の書籍の配列である。『通略』が時代順に引用したのは、P二五二六より体裁が整っているといえる。『通略』を編纂させた梁武帝が『通史』の編纂も命じていたことも踏まえると、類書引用の「時代順」には通史的な意識が現れていると考えられる。「字・経＋その他」の配列は南朝系類書の共通的特徴かもしれないが、『通略』は「その他」の部分で時代順に整理したことで、ほかの南朝系類書を抑えて最も影響力のある南朝類書となったのではないか。

では、「字・経＋その他」という三分構造を如何に理解するか。これには唐代に編纂された仏教類書『法苑珠林』

の構造が参考になる。『法苑珠林』の篇は「述意＋引証＋感応縁」という三部分に分けられる篇が存在する。述意とは篇目に対する総合的な解釈であり、引証とは内典を引用した関連解釈であり、感応縁では外典が引用されている。述意部は総叙に相当し、引証部は經典解釈から派生したものであり、感応縁部は前二者に対して事例を挙げて証明するものである。これは『遍略』の三構成と似ている。字書は元々訓詁の書で、篇目を説明するための書籍である。経書は言うまでもなく、ほかの書籍から抜き出た地位にある。その他の書籍は、「感応縁」のように、具体的な事象として経書を支えていると考えられる。この構成を踏まえて整理すると、『遍略』の篇目は「基本定義＋經典による説明＋具体的事象」という構造だと理解できる。これは、南朝人士の事物を理解する構造を具現化したものと考えられる。ただし、『遍略』から『法苑珠林』までには非常に長い時間が経過している。そこで、『遍略』から時間的に近い例を見てみよう。

隋の大業七年（六一二）に編纂された『編珠』は、煬帝が文章中に故実を使用する際の便宜を図るべく編纂されたハンドブックで、その形式は『初學記』の事対部分に似ており、『四庫全書』では類書に帰属している。その分類と引用形式を一例に挙げると、以下のようになる。

天柱 地軸

列子曰、共工氏怒觸不周山、天柱折地維絶。河圖括地象曰、崑崙之山、横爲地軸。

『編珠』序はその構造を「其の朱書する者は故實、墨書する者は正義」と説明している。朱墨で経注の区別をするのは後漢で経注が合併して以来の常套手段である。現在は『編珠』原文の朱墨の状況を見ることはできないが、上掲

の例の「天柱」「地軸」が朱書、引用された『列子』『河圖括地象』が墨書されていたことは容易に想像できる。「天柱」は『列子』に由来する故実、「列子曰……」は引用文による正義である。この「故実+正義」という二重構造を踏まえると、『通略』の構造を「字・経（故実）+その他（正義）」と解釈できるのではないか。つまり、『通略』やP二五二六のような南朝系類書の条文配列は、注釈書の影響を大きく受けたと考えられる。<sup>(28)</sup>

注釈の角度から類書篇目中の条文配列を理解するならば、こうした編纂方法には目録が反映しているのではなく、事類解釈の思惟方式が反映しているといえる。以下では区別のため、『通略』とP二五二六のような配列法を注釈体、『修文殿』のような配列法を目録体と呼ぶ。このように見ると、南朝系類書と北朝系類書とは大きな差異がある。本稿は南朝系類書の性格に絞って検討し、北朝類書については別稿にて検討することにした。

## (二) 南朝系類書と漢唐間注釈史

南朝系類書の注釈的性質は、類書が漢魏南朝で発展した状況を理解する突破口となる。「はじめに」で述べたように、天・地・人・事物という構成によって分類・整理する、四部の垣根を越えた編纂形式が、類書の特徴である。かかる構造の書籍が如何なる精神と歴史的背景の下に形成されたかは、類書研究の重要な問題である。この問題を提起した湯浅邦弘は、類書を規定する要件として「世界」「分類」「引用」の三つの要素（世界全体の事物を対象にする姿勢・対象とした世界全体の事物を分類する形・関係資料をその分類項目に沿って引用の形で採録する体裁）を提示し、その成立を支える思想的基盤として、『易』に窺える万物を包括し分類し得るといふ世界観・認識観、氣の思想を背景と

する物類感応の思想、著述の基本的態度に関わる「述べて作らず」という経学の伝統など、類書の誕生を支える諸思想を指摘した。<sup>(29)</sup> こうした思想は類書の特殊性を構成する重要な要因であり、筆者もこれを認めるものである。しかし、別の角度から考えると、以上の思想は明らかに魏晉以前から存在しており、そうした思想に基づく類書が何故魏晉以降になってようやく出現したのかという問いには、十分に答えられないように思われる。

類書の起源をめぐる議論には、雑家説・『爾雅』説・『易』説などがある。<sup>(30)</sup> また、紙の普及、知識層の拡大、書籍増加による抄本の流行、文章作成時の典故の必要性といったことが、類書が南朝で流行した要因として指摘されている。<sup>(31)</sup> 南朝系類書の注釈的性格を解明したことで、『爾雅』説は最も注目すべき説となった。しかし、『爾雅』説は主として、天地万物を分類する『爾雅』と類書の篇目構成の共通性に注目するものである。訓詁書から南朝系類書までの間には相当な距離が存在している。筆者はかつて、南朝系類書を含む初期類書概念と特徴を分析した。その内容を簡潔にまとめれば、趙宋以降の類を以て相い従う書物の大部分を類書に分類する認識と異なっており、初期類書とは『皇覽』を追述し、内容と形式は『通略』等の南朝系類書を継承しており、魏晉以降に作成された雑伝・地理書をはじめとする各種史部書籍を大量に収録した、一連の書籍である。<sup>(32)</sup> つまり、南朝系類書の特徴には、湯淺説の「世界・分類・引用」三要素のほかに、史部書の大量引用という要素もある。

『爾雅』自体は既に「世界」「分類」の二点を満たしている。しかし、三点目の「引用」、且つ筆者が指摘した大量の史書の引用という特徴は、魏晉以降の『爾雅』注釈史、ないし学術発展史から探求する必要がある。具体的には、どの段階から書籍を引用して『爾雅』本文に注釈をつけ始めたのか、また引用の内容が各種書籍、特に史籍へと拡

大したのが問題となる。

これについて、関清孝は『爾雅』注の研究で既に答えを提出している。漢代には健為文学注・劉歆注・樊光注等の多くの『爾雅』の注釈が生まれたが、これら先行の注釈が『詩經』を中心として殆どが經書の範囲内だったのと異なり、東晋郭璞の『爾雅注』は經書を始めとする先行文献を求め、經書以外の書物も多く引用して、史料による裏付けを行った。『爾雅』は五經を読むための書物という伝統的な考え方が、郭璞の『爾雅注』の登場によって一新され、經書を始めとする世のあらゆる事物を知るための書物であるという『爾雅』観が発生したと関は指摘する<sup>33</sup>。

この指摘は『爾雅』から『遍略』への転換過程を理解する上で重要である。つまり、郭璞の注釈を経て、『爾雅』は經書を理解するための字書から万事万物を理解するための書籍へと飛躍したのである。この飛躍をなさしめた動因は、郭璞が經書の壁を突破し、各種書籍を網羅する注釈方法を採用したことにある。郭璞『爾雅注』こそ、『遍略』を代表とする類書と形式(引用・分類)と精神(世界)の上でびたりと一致する書籍なのである。

漢末魏初に編纂された類書の始祖たる『皇覽』から梁天監一五年(五一六)に編纂が始まった『遍略』までの間には、三百年近い時間が経過している。この三百年の間で、南斉の『史林』『四部要略』のほかに、基本的に新たな類書は編纂されなかった。津田資久は、『皇覽』が「世界」「分類」「引用」の三要素を具備していたことを証明している<sup>34</sup>。筆者は前稿でこれを一歩進め、『遍略』を代表とする齊梁類書と『皇覽』の区別は、前者が史部書を大量に引用していることだと指摘した。『皇覽』が編纂された漢末魏初には史書は未だ經学の付属物であり、『皇覽』の全貌を想像するならば、『類聚』『太平御覽』から史部書・集部書を削除した体裁であったであろう。こうした変化は何故

生まれたのか。『皇覽』から『通略』への変化の中で、郭璞『爾雅注』はその懸け橋となってくれる。郭璞『爾雅注』が示す、経書だけでなく、それ以外の書籍、とりわけ史部書を引用して事物を解釈し理解する態度は、こうした変化を理解する上で重要な鍵となる。結局、この時期の類書の変化の背景には、魏晋南北朝時代の史学觀念の形成という、長年の課題が横たわっているのである。これは非常に複雑な問題であるが、類書が如何に史部書を吸収したかという本稿の主題に則して焦点を絞れば、いつから雑伝や地理書を際立った特徴とする史部書が、『通略』『修文殿』『類聚』等の類書に注釈の根拠として頻繁に引用されるようになったのか、という問題に集約することができる。

魏晋南北朝は注釈の時代とも呼ばれる。漢代の章句の学が漢末に否定され、魏晋以降に集注を代表とする各種新型の注釈書が続々と出現し、かつ注釈の対象も経部書からその他の書籍にまで拡大した。南朝以降では漢晋の注釈にさらに注を施す義疏学が生まれ、南北統一後の唐代に至って、それまでの経書注釈の成果が選択を経て『五經正義』に結実し、今日まで継承されている。類書の形成についても、こうした魏晋南北朝の注釈の歴史の中で理解すべきだろう。劉知幾は『史通』内篇・補注で漢代以来の注釈状況に言及し、①訓詁を主とする儒宗式注釈、②本文のほかに事柄を補充する注釈、③様々な史書の異説をまとめて欠を補う注釈、④子注（自注）式の注釈、の四種類に分けた。本稿にとって特に注目すべきなのは、②と③のような事柄を補充する注釈の展開である。

訓詁式の注釈と史事を補充する注釈が各々重点を異にしていることは、「注経は明理を以て宗と爲し、理は訓詁に寓し、訓詁明らかなれば理自ら見る<sup>あらは</sup>。注史は達事を以て主と爲し、事明らかならざれば、訓詁精と雖も益無きな

り<sup>(35)</sup>という錢大昕の指摘から明白である。ならば、南朝系類書の注釈は訓詁と史事の両方を結合したと言える。しかし、天地人物の世界観が存することを類書の原点とするならば、漢代に『爾雅』が天地万物の世界観を反映するものとしてテキスト化してより（世界観の具現化）、漢晋期に經書を主とする訓詁式『爾雅』注が増加し（訓詁式注釈）、また注釈引用書籍を史部書・子部書にまで拡大させた郭璞『爾雅注』が生まれ（史事補充式注釈）、そして純粹に「某書曰」で直接書籍を引用する形式で各種性質の書籍を網羅する南朝系類書が成立するまで、漢代から南朝まで長い時間を要したのである。

この類書成立史は漢唐間注釈史全体の上に如何なる位置を占めるだろうか。以下では純粹に史書を引用するという視角から、先行研究を踏まえつつ、漢唐間注釈史の変遷を辿ってみたい。この時期の注釈書は大量に作られ、かつ散逸したのも多いため、分析の際に万全を期すことは不可能であることから、ここでは代表的なものをサンプルに取り上げ、分析を進めることとする。

まず經部書の注釈から見ると、章句から集注へ、さらに義疏へと変化していった。この中で転換点となるのは、杜預の『春秋左氏經傳集解』である。加賀栄治は、杜預は漢末以来の博学通明の注釈態度を継承しつつ、春秋の義、すなわち理念は事の実によってでなければ明らかにされないという態度から、春秋の義を「史」の線の上に乗せて解釈した、という<sup>(36)</sup>。そうであれば、史部書を直接には引用しないものの、杜預の史的な注釈態度は、注釈の歴史において重要であろう。

次に史部書の注釈の発展に注目しよう。史書の解釈は、当初は史実を補充することを特徴としていなかった。師



法のある『漢書』の注釈史を見てみよう。吉川忠夫は唐代以前の漢書注釈を二つの時期に分類した。一つは魏晋期で、東晋・蔡謨『漢書集解』に収束する。もう一つは斉梁時期で、陸澄・劉昭の漢書注を代表とする。前者は『漢書』が広く読まれ教育の場で利用されている状況に対応すべく編まれたものであり、後者は異聞の収集を特徴とする<sup>(37)</sup>。このように、『漢書』の注釈史は、経学の訓詁式注釈から、類書のような引用書籍の範囲拡大へと、発展したといえる。この転換点は、西晋・臣瓚『漢書集解音義』である。顔師古の「漢書叙例」によれば、臣瓚は注釈中で『竹書紀年』を引用しており、引用書籍の範囲が拡大し始めたことが窺える。

最後に集部書の注釈を見てみよう。大量の史書を引用して『文選』中の諸作品に注釈を施す『文選』李善注は、「事を釋して義を忘る<sup>(38)</sup>」とされ、六朝末期ないし唐初の注釈書が大量の史書を使用していたという特徴を十二分に示している。しかし、文学作品の注釈がはじめからこのような形式だったわけではない。例えば、司馬相如「上林賦」<sup>(39)</sup>「水玉磊砢なり（水玉磊砢）」に対し、郭璞は「水玉、水精なり。磊砢、魁壘の貌なり（水玉、水精也。磊砢、魁壘貌也）」と注したが、李善は『山海經』「常庭之山、其上多水玉」を付している。李善が引用した『山海經』の内容を、『山海經』注釈者である郭璞が知らなかったはずがない。郭璞から李善への変化は、賦を読む際の注が語義を重視することから、經典中の語源を重視するようになるという転換を反映している。こうした転換が表れている例として西晋・劉逵『三都賦』注が挙げられる。これはそれまでの注釈と異なり、地方志を中心に当時最新の資料を大量かつ確実に引用する態度を示したという<sup>(39)</sup>。つまり、文の注釈も訓詁から次第に史書の引用へと転換していったのである。

以上の整理から、経注・史注・文注の諸分野で、訓詁式注釈から史事補充式注釈になったという流れがあることが指摘できる。その転換点は杜預『春秋左氏経傳集解』、臣瓚『漢書集解音義』、劉逵『三都賦』注が出現した西晋期であろう。郭璞が『爾雅』に史書を直接引用する形式で注釈したからことも、彼以前に既にそうした注釈の流れがあったと理解できる。西晋という点、四部分類法の出来上がる時代、史学が経学から独立する時代である。このような歴史展開を前提として、ようやく南朝系類書が出現したのである。

### おわりに

本稿は、劉安志が提出した南朝系類書と北朝系類書の相違から出発し、先行研究を再検討して、『遍略』の引用文は四部分類によるという従来の認識から、南朝系類書は「字・経＋その他」という注釈的なあり方で書籍を引用していることを明らかにした。このような編纂方法は漢代以降の学術変化、特に史学の発展と密接に繋がるといふことが、本稿の主張である。

南朝系類書の引用方法は、南朝人士の事物を理解する認識方法を反映している。このような南朝系類書は、突然出現したのではなく、漢末以降の学術の変化と密接につながる。類書の解釈は基本的に、漢末古文学の博引通貫の学術的姿勢と一致する。類書の重要な淵源たる『爾雅』の学も古文学がテキストや訓詁を重視して興ったものである。また漢末の通儒の学によって興ったものでもある。そうして出現したのが、五経群書を集めた曹魏期の『皇覽』である。

しかし、漢末の學術状況から言えば、通博とはいっても通儒の範囲に留まるものである。例えば、『皇覽』の編纂に携わった劉昭の『釋名』は、「天地・陰陽・四時・邦國・都鄙・車服・喪紀、下は民庶應用の器に及ぶ」<sup>(40)</sup>という分類から見れば、『爾雅』以上に齊梁類書の構成に近い。しかし、現存の『釋名』の内容から見ると、基本的には訓詁に留まり、典籍の引用は少ない。このため、漢末通儒の学は『皇覽』出現の背景ではあるが、『皇覽』から齊梁類書への展開には、魏晉以降の史部・子部・集部書籍が出現するだけでなく、史書を重視する意識も出現する必要があるといえる。

史部が儒家春秋類から抜け出て目録上独自の類をなしたのは魏晉期である。しかし、史学意識が独立し、史学が一つの専門学術となるには、「經史の学」「文史の学」が次第に分離し、子部を超越する過程を経なければならぬ<sup>(41)</sup>。この過程は『隋志』史部の成立をもって達成されたと目されている。また、史学の範疇も次第に拡大していった。聶激萌によれば、三史を主とする正史から政治実践に関わる行政関係の記述が拡充し、雑伝が取り込まれ、地理書・譜録が含まれるようになった<sup>(42)</sup>。魏晉注釈史から見れば、注釈に史書が次第に吸収され、さらに引用範囲も拡大したことは、以上の指摘に沿うものである。つまり、類書が魏晉南北朝に発展した背景には、史部書籍の生産と史学意識の発展・拡張があり、これによって豊富な書籍を引用する類書が出現したのである。

『類聚』の主要な引用書籍は史部書であり、その引用範囲は『隋志』史部全一三類を網羅し、『通略』の時代順をも概ね保存していた。この意味で、類書は南朝史学の動態を考察する優良の材料だといえる。さらに、南朝系類書から北朝類書への変化は、南北朝文化研究において重要な問題となるであろう。今後の課題としたい。

註

- (1) 類書研究史は、大淵貴之『唐代勅撰類書初探』(研文出版、二〇一四年)序論参照。
- (2) 議論の概要は、劉安志「華林遍略」乎?〈修文殿御覽〉乎?——敦煌写本P.256号新探——〔同〕『新資料与中古文史論稿』、上海古籍出版社、二〇一四年、初出二〇一三年)参照。
- (3) 森鹿三①「亮阿闍梨兼意の「香要抄」について」(塚本博士頌寿記念会編『仏教史学論集——塚本博士頌寿記念会——』塚本博士頌寿記念会所収、一九六一年)、②同「修文殿御覽について」(『東方学報』(京都)三六、一九六四年)。
- (4) 勝村哲也①「修文殿御覽卷第三百一香部の復元——森鹿三氏「修文殿御覽について」を手掛りとして——」(『日本仏教学会年報』三八、一九七二年)、②同「修文殿御覽新考」(『鷹陵史学』三・四、一九七七年)、③同「修文殿御覽天部の復元」(山田慶児編『中国の科学と科学者』京都大学人文科学研究所所収、一九七八年)、④同「芸文類聚の条文構成と六朝目録との関連性について」(『東方学報』(京都)六二、一九九〇年)。
- (5) 前掲註(2)劉論文参照。
- (6) 劉安志「關於中古官修類書の源流問題」(前掲註(2))
- 同氏著書所収、初出二〇一三年)。
- (7) 『太平御覽』卷六〇一文部一七・著書上所引『三國典略』「初、齊武成命宋士素錄古來帝王言行要事三卷、名爲御覽、置於齊王巾箱。陽休之創意、取芳林遍略、加十六國春秋・六經・拾遺錄・魏史第書、以士素所撰之名稱爲玄洲苑御覽、後改爲聖壽堂御覽。至是珽(祖珽)等又改爲脩文殿上之。」
- (8) 前掲註(6)劉論文参照。
- (9) 前掲註(4)勝村論文③参照。
- (10) 前掲註(4)勝村論文④参照。
- (11) 『廣弘明集』卷三「七錄序」及著作佐郎李充始加刪正、因荀勗舊簿四部之法、而換其乙丙之書、沒略衆篇之名、總以甲乙爲次、自時厥後世相祖述。」
- (12) 劉安志『修文殿御覽』佚文輯校(前掲註(2))同氏著書所収、初出二〇一二年)。
- (13) 前掲註(4)勝村論文①参照。
- (14) 辛德勇「由梁元帝著述書目看兩晉南北朝時期的四部分類体系」(『文史』第四輯、一九九九年)。
- (15) 前掲註(4)勝村論文④参照。
- (16) 前掲註(4)勝村論文④参照。
- (17) 福田俊昭『芸文類聚』(卷八十四)本文の構成につ

て〔大東文化大学東洋研究所編『芸文類聚訓読付索引（第八十四卷）〕大東文化大学東洋研究所、二〇一一年。

(18) 卷一天・日・雲、卷二虹・春、卷三夏、卷四五月五日、卷八河水、卷三二贈答、卷三八宗廟。

(19) 劉葉秋「唐歐陽詢等『芸文類聚』」〔同『類書簡説』、上海古籍出版社、一九八〇年〕。

(20) 汪紹楹『類聚』校序〔『藝文類聚』、上海古籍出版社、一九六五年〕は、『類聚』に梁の避諱が残っていることを指摘している。

(21) 例えば、『顧子』・『周生烈』・姚信『士緯』・『蘇子』・『秦子』・『物理論』・『田球子』・『正部論』等の書籍である。  
(22) 其有事出於文者、便不破之爲事、故事居其前、文列于後。

(23) 『藝文類聚』卷七三雜器物部詔篇「梁諸葛恢表曰、詔云、行當別離、以爲悵罔、分致甄耗一、劍一、琉璃碗一、貴達心領錄之、天恩望極天地、施鈞不異遠近。」及び同書卷八四宝玉部瑠璃篇「諸葛恢集、詔答恢、今致瑠璃碗一。」（傍線は筆者）

(24) 『隋書』卷三五五經籍志四「晉太常卿殷融集十卷（梁有衛尉張虞集十卷、光祿大夫諸葛恢集五卷、錄一卷、亡。）」

(25) 大淵貴之「『芸文類聚』本文批判の一指標——一詩文一

『藝文類聚』から見た初期類書の性格 付晨晨

部立ての原則について——」〔前掲註（1） 同氏著書所収、初出二〇一〇年〕は、『藝文類聚』は編纂にあたって一つの詩文を一つの部立てにのみ配置することを原則としたと指摘し、「文」の部分に収録された詩文が重複して複数の部立てに配置されている場合、これは後世のテキスト補綴や改竄等によって生じた可能性が非常に高いものだとする。本

稿は基本的にこの意見に同意する。ただし、大淵も認めているように、『藝文類聚』が先行類書を孫引く過程で「文」の部分に配置すべきものとして「事」の部分から除外すべきだった詩文作品を除外し損ねた結果、「事」の部分に詩文作品が残留する場合があります。後世の補入ではないと判断する余地も残されている。本論で挙げた盤篇と瑠璃篇の二つの部立てに出現した諸葛恢の文のうち、少なくとも瑠璃篇の「諸葛恢集」は「事」の部分に残留してしまったものだろう。

(26) 「文」で「馮敬通」と記している例もある（卷六〇刀・卷七三杯）。しかし、全体的に「文」は作者の字でなく名で記するのが一般的であるため、以上の字で表記する二例は例外と考える。

(27) 其朱書者故實、墨書者正義。

(28) 『漢書』五行志は五行に関する経一伝一説一占応という

九七

構造をとり、本稿で論じた南朝系類書の構造と似ている。しかし、これは五行世界の説明方法であり、四部にわたる書籍を引用する形で事物を説明する類書の方針とはやや異なると思われる。この点は稿を改めて検討したい。

- (29) 湯浅邦弘「類書の成立」(平成六・七年度科学研究費補助金研究成果報告書「類書の総合的研究」所収、一九九六年)。
- (30) 胡道静「類書の起源和遠源」(同『中国古代的類書』、中華書局、一九八二年)。
- (31) 木島史雄「六朝前期の孝と喪服」(小南一郎編『中国古代礼制研究』京都大学人文科学研究所所収、一九九五年)。
- (32) 付晨晨「齊梁類書の誕生——初期類書の系譜と南朝士人——」(『史学雑誌』一二八—二、二〇一九年)。
- (33) 関清孝「郭璞の注釈学——『爾雅注』の方法——」(『東方学』一〇九、二〇〇五年)。
- (34) 津田資久「漢魏交替期における『皇覧』の編纂」(『東方学』一〇八、二〇〇四年)。
- (35) 錢大昭「三國志辨疑」自序「注經以明理爲宗、理寓於訓詁、訓詁明而理自見。注史以達事爲主、事不明、訓詁雖精無益也。」
- (36) 加賀栄治「杜預の春秋解釈方法・態度」(『中国古典解釈史・魏晉篇』、勁草書房、一九六四年、初出一九五三・九五五年)。
- (37) 吉川忠夫「顔師古の『漢書注』」(『六朝精神史研究』、同朋舎出版、一九八四年、初出一九七九年)。
- (38) 『新唐書』卷二〇二文藝伝中李邕伝「始、善注文選、釋事而忘意。」
- (39) 栗山雅央「三都賦」劉逵注の注釈態度」(『中国文学論集』四〇、二〇一一年)。
- (40) 『釋名』序「天地、陰陽、四時、邦國、都鄙、車服、喪紀、下及民庶應用之器。」
- (41) 井上進「四部分類の成立」(『名古屋大学文学部研究論集(史学)』四五、一九九九年)、胡宝国「経史之学」、「文史之学」(同『漢唐間史学的發展(修訂本)』、北京大学出版社、二〇一四年、初出一九九九年)。
- (42) 聶激萌「從丙部到史部——漢唐之間目錄学史部的形成——」(『中国史研究』第三期、二〇一五年)。

(東京大学大学院人文社会学系研究科

博士後期課程単位取得満期退学)

# THE TOYO GAKUHO

Vol. 101, No. 2 - September 2019

(THE JOURNAL OF THE RESEARCH DEPARTMENT  
OF THE TOYO BUNKO)

The Character of the Early *Leishu* Genre Based on  
the *Yiwen Leiju* Collection

FU Chenchen

The origins and earliest history of the *Leishu* 類書 genre of encyclopedias quoting passages from earlier literary erudition on selected themes, and thus expressing the worldview and scope of knowledge of the compilers, is not yet fully understood, due to the fact that almost all *Leishu* compiled before the Sui 隋 and Tang 唐 periods have been scattered and/or lost. A recent important study has shown that the earliest *Leishu* could be categorized into two types based on their content: those of the Southern Dynasties (南朝) and those of the Northern Dynasties (北朝); however, disagreement still remains among scholars over such issues as the order and collation style of the items contained in the earliest works. This article, accordingly, analyses the characteristics of the early genre based on a critique of the research to date, in order to place the historical development of the *Leishu* within the context of the history of scholarly inquiry between the Han and Tang Periods.

After re-confirming that the passages quoted in the remaining fragments of *Xiuwendian Yulan* 修文殿御覽, compiled by the Northern Qi (北齊) Dynasty were arranged according to the four traditional literary categories of *Jing-Shi-Zi-Ji* 經史子集, the author shows that the citations of *Hualin Bianlüe* 華林遍略, compiled by the Liang 梁 Dynasty, did not, as already known, conform to that order, but rather one in accordance with the three categories of “Zishu 字書 (Chinese dictionary)-Jing 經-other books (listed in chronological order).” In view of the fact that Dunhuang Document P.2326, while not *Hualin Bianlüe*, but also compiled by the Southern Dynasties, are arranged in this same latter order (with no chronological order for “other”), such a struc-

ture should be regarded as the standard by which the *Leishu* from the Southern Dynasties were compiled; and was strongly influenced by the development of the art of annotation-commentary on the Jing, Shi and Ji genres from the Han Dynasty on. So it does not follow that the *Leishu* genre always presented comprehensive surveys of the all the Jing-Shi-Zi-Ji works from the start, but rather with both changing styles of erudition and historical consciousness, *Leishu* gradually came to cite works from a more and more diverse number of themes, topics and sources.

The author concludes that the *Leishu* compiled in the Southern Dynasties, were not convenient reference books for writing poems, but rather encyclopedias for understanding the worldviews of ancient literature, developing in close connection with the growth of scholarship, in general, and historical consciousness, in particular, from the Han Period on.

Reconsidering the Battle of Taiyuan in the Song-Jin Transition:  
The Military Process during the Demise of the Northern Song Dynasty

Zou Di

The Jingkang 靖康 Incident marked the end of the Northern Song Dynasty (北宋), which was regarded as the watershed moment of the Song history. It also ushered in the beginning of the southward migration of northern ethnic groups. The Jingkang Incident has been regarded to embody the military weakness of the Song Dynasty. However, before the fall of the Northern Song, state governance was so stable that the Southern Song Dynasty (南宋) could be rebuilt immediately after its demise. This implies that the military power of the Northern Song Dynasty was not that insubstantial as discussed in the previous scholarship. This article defines the era between the Song-Jin war and the fall of the Northern Song as a “military process,” taking the battle of Taiyuan 太原 as a decisive moment. It mainly focuses on the international circumstance that the Northern Song faced, and discuss the complicated reasons of its destruction beyond the simple “military weakness” hypothesis.

The Northern Song’s miscalculation of the Jin military strategy resulted in the latter’s occupation of Taiyuan and the entire Shanxi 山西. The North-